

平成 27 年 5 月 31 日実施
「裁判所職員採用試験総合職」
(家庭裁判所調査官補)

心理学分野

【答案例】

平成 27(2015)年

「裁判所職員採用試験（総合職）」

《家庭裁判所調査官補》

第1問 心理学概論

エピソード記憶について、長期記憶の構造に触れながら、400字以内で簡潔に説明せよ。

[解答例]

エピソード記憶とは、長期記憶の一つであり特定の時間的・空間的文脈の中に位置づけることのできる個人の出来事の記憶を指す。

長期記憶とはスクワイヤらによれば、大きく宣言的記憶と非宣言的記憶に分けられる。前者は想起意識を伴うため顕在記憶とも呼ばれ、この中にエピソード記憶と意味記憶が含まれる。意味記憶とは一般的な知識についての記憶である。他方、非宣言的記憶は想起意識を伴わないが行動や動作、判断などに影響を与える記憶(潜在記憶)であり、技能等の手続き記憶やプライミングなどを含む。

これらのうちエピソード記憶と意味記憶との関係は、神経心理学的には独立であるともいわれるが、認知処理の側面からは相互に関連しているといえる。すなわち、エピソード記憶は意味記憶がなければ成立しえず、その一方、意味記憶の多くは最初はエピソード記憶として入力されるためである。(370字)

参考： 特になし。

[コメント]: エピソード記憶は誰もが知っているタームだが、いざ書こうとするとどの切り口で書くか、でちょっと悩むかもしれない。「長期記憶の構造」については、タルヴィングの分類で書いてもよいだろう。ポイントは、まずはエピソード記憶の定義を正確に書くこと。そして長期記憶の構造(区分)について触れながら、エピソード記憶の特徴について説明をすること、であろうか。

第2問 臨床心理学

系統的脱感作は、①どのような考え方に基づく治療法であるか、②どのような手順で治療を行うかについて400字以内で簡潔に説明せよ。

[解答例]

系統的脱感作はウォルピにより開発された恐怖症の治療技法である。この技法は①学習理論を根拠としている。すなわち、不適応行動は新たに学習しなおす(誤った学習を消去する)ことで治療できるという考えである。より具体的には逆制止の原理を用いる。つまり、ある刺激に対して誤って不安や恐怖が生じてしまうクライアントに対し、正反対の反応であるリラックス反応を条件づけることにより、恐怖や不安を生じないようにするのである。

②手順としては、(1)不安階層表の作成：最も強い恐怖・不安が生じる場面から最も恐怖・不安の小さい場面までを表にする。(2)弛緩法を学ぶ：クライアントは弛緩法(リラクゼーション法)を学習する。(3)脱感作を行う：不安階層表の一番弱い不安の場面の刺激を与え、そこで弛緩することを通じて不安が生じないようにトレーニングを行う。これを繰り返しながら、徐々に階層表の不安レベルの高い段階へと進めていく。(398字)

参考：氏原他 心理臨床大事典(改訂版) 培風館

コメント：講義でかなり丁寧に紹介したので、書きやすかったのではないだろうか。ポイントは言うまでもなく、上記の解答例がすべてポイントである。ちなみに「自律訓練法などのリラクゼーション法」などと書かずに「弛緩法」にしたのは、単に文字数の節約のためである。

第3問 社会心理学

印象形成について、性格特性を表す言葉(例えば「温かい」、「冷たい」など)を被験者に提示する古典的な研究を例に挙げながら、その概要を400字以内で説明せよ。

[解答例]

アッシュの古典的な印象形成の研究は、社会心理学における対人認知研究の出発点の一つである。

彼は、性格特性語(形容詞)のリストを刺激として用い、被験者にその印象を評価させた。リストを構成する形容詞として、一方のリストに「温かい」、他方のリストに「冷たい」を入れ、それ以外はすべて同じ形容詞を用いた。この結果、全体の印象に大きな影響を与える中心的特性と、それほど影響を与えない周縁的特性があることが示された。アッシュはまた、同じリストの形容詞の提示順序を逆転させるなどして順序の効果を調べた。この結果、最初に提示する形容詞が全体の印象に大きく影響することが示された(初頭効果)。

こうした研究からアッシュは全体の印象は各々の性格特性語の総和で決まるのではなく、全体印象の統合過程で個々の特性語の意味が変容するというゲシュタルト的な全体モデルを提出した。

(372字)

[参考]: 日本社会心理学会編 社会心理学事典 丸善

[コメント]: 実験研究の概要を説明する問題が出ただろうと予測していた通り、出ました。

アッシュの実験については誰でも知っているはずなので、これは多くの人が余裕で書けたのではないだろうか。ポイントとなるキーワードは「中心的特性・周縁的特性」は「順序効果(初頭効果)」。

あとは、研究の手続きや概要をわかりやすくまとめられればOKか。

第11問 教育心理学

発達の最近接領域(最近接発達領域)について400字以内で説明せよ。

[解答例]

ヴィゴツキーは子どもの知的発達水準を自力で達成できる現在の発達水準と、他者の助力や協同により達成が可能な水準との二つに分けた。この二つの水準のずれの範囲を最近接領域と呼ぶ。後者の水準は、将来的には自力での達成にまで発展していく可能性を示すものである。ヴィゴツキーは、教育が影響を与えるのはこの発達の最近接領域においてであると考えた。

ヴィゴツキーは、彼の同時代のピアジェとは対照的に、子どもの発達の可能性は周囲の大人やより発達の進んだ者との相互作用を通して促進されると考えたが、最近接発達領域の考えはこれをよく表している。また最近接発達領域の考え方は、教師や親から教えてもらうことのみならず、仲間たちとの協同学習にも当てはまる。つまり、仲間どうしが、それぞれに相互の最近接領域に刺激を与え合うことで理解を促進させていくことが協同学習の意義であるともいえる。(378文字)

[参考]: 中島義明監修 心理学辞典 有斐閣, 梅本・大山 心理学への招待 サイエンス社

[コメント]: おとしあたりから、講義の中で高橋がこれが出る出ると騒いでいたのだが、やっと今年になって出題されました。一度でも勉強していれば、定義などについて説明するのは難しくないと思うが、400字を埋めるのは結構きついかもしれない。この解答例でも、後半は書くことが尽きてしまったので、最近接発達領域の考えはヴィゴツキーの発達観が(知的発達が相互作用により促進される)が最もよく表されたモデルであるとか、そういった周辺のことでひっぱった感がある。